ジャスティン・ウォーカー〜残された予言〜

kenG_112

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジャスティン・ウォーカー～残された予言～

【Ｎコード】
Ｎ６１９１ＢＢ

【作者名】
ｋｅｎＧ―１１２

【あらすじ】
二〇一二年十二月二一日。
人類は滅び新しい人類が目覚めた。

二〇二〇年。能力に目覚めた人類は新しい世界を築き始めていた。
孤児のジャスティン・ウォーカーは、人類能力訓練学校へ入学する。
今まで気づかなかった自分の能力、新しい友や先生、多くの人々との出会いを通じて成長していく。そして、両親の隠された死の真相を知り、世界をかけた大きな陰謀に巻き込まれていくのであった。

―――――――

第1章　新人類（前書き）

西暦二〇一二年十二月二十一日

破滅の時は近い。

人類は滅びの時を迎えるであろう。

ジョセリーノ・ルイス

第1章　新人類

西暦二〇一二年十二月二十一日アメリカ。
北アメリカ大陸西部を北西から南東に連なる険しいロッキー山脈。山脈には薄く霧がかかっている。
コロラド州エルバート山頂上付近。まだ辺りは薄暗くもうすぐ太陽が昇ろうとしている時だった。当然人はいるはずもなく、音一つない静かな朝を迎えていた。すると急に霧が晴れてきて、一人の男とその後ろに数人の子ども達が現れた。男性は中年で、子ども達はせいぜい十二、三歳ぐらいのように見える。真冬の時期しかも山頂付近だというのに、真夏のような格好をして息も切らさずに山頂に向かっている。山頂はまるでそこだけ削り取られたかのように平地になっていた。直立した石が円陣状に並んび、その中心に小さな祭壇があった。
「間もなく日が昇る。ウェヌス、他の子ども達はうまくやれそうか？」
「・・・はい。彼らもどうやら目的地についたようです」一人の女の子が目をつむって数十秒後に答えた。
「本当にやるんですか博士」別の男の子が中年の男に話しかけた。
「今更何を言っているんだエバンス。俺たちはそのことについて何度も話し合ったはずだ。このままだと第3次世界大戦になる可能性だってある。俺たち自身のためでもあるんだ」
少年は、そう言ったものの不安そうな顔で祭壇に上る男の後ろ姿を見た。
「その通りだギャビン。君たちのおかげでここまで来れた。歴史を調査してきてきた結果、この結論に達することができた。必ずうまくいくはずだ。それに…」
「博士？」
子ども達は男の顔を覗こうとしている。男は祭壇にある何かを動

かし、準備を終えたように、ゆっくりと子ども達の方に振り返った。
「君達の中には不安なものも当然いただろう。しかしここまで私を信じて付いてきてくれてありがとう。ギャビンも言ってくれたようにこれは世界のためでもあり、私達のためでもあるんだ。君たちが普通に暮らせるように。そして世界を救うためにも必要なことなんだ。あともう一息だ。みんな私を信じてくれるね」
子ども達は、不安ながらも頷いてみせた。
「でも博士。本当にうまくいくのかしら」
「大丈夫だ。君達は、今までも大人が成し遂げられないような多くの事を成し遂げてきた。ウェヌス。私が何度君の能力に助けられたことか」
男にそう言われると彼女の不安そうな表情は和らいだ。
「俺達ならやり遂げられるさ」
「そうだねもう少しだ。頑張ろう」
「ありがとうみんな。きっと君たちにとって素晴らしい未来が待っている。では、最後の任務だ。みんな自分の役割は分かっているね？頼んだよ。……みんな幸運を祈っている」
子ども達は、大きく頷きそれぞれ別々の方向へと去っていった。
ウェヌスだけ残っている。
「間もなくだ。彼らとの時間調整は大丈夫そうかね」
「大丈夫です、博士」
「では私の合図があるまで彼らにも待機するように伝えてくれ」
「はい博士」
男は一枚の写真を取り出して、はるか向こうの何かを見ていた。
「博士その写真は？」
「もう一つの家族さ。・・・もうすぐだ」
男が眺めるはるか向こう。アメリカ、ニューヨーク市マンハッタン。
いつも通り日常を送る人々で街中があふれかえっている。

会社に早々と出勤する人。学校にいく準備をする子ども達。寝坊してしまった人。家で朝食の準備をしながらニュースを見ている人。

この日も何事も無く一日がすぎるはずだった……

「おはようございます。全国の天気です。今日のニューヨーク、マンハッタンの最低気温はマイナス二度で、日中も肌寒い一日になるでしょう」

一人の女性がキッチンで朝食の準備をしながらテレビを見ていた。

「やだわ、まだ続くのかしらこの寒さ。先週からずっとこの寒さだわ。早く暖かくならないかしら。洗濯物も乾かないし。本当にあの子達の服はいつも泥だらけなんだからまったく」

「わしは、この時期に暖炉にあたっている時が一番幸せだがね」

一人の老人がリビングに現れた。

「あら、おはようございますお父様。朝食もうすぐ出来ますわ」

「おはようソフィア。ありがとう」

そう言うと老人はテーブルの前に置かれた椅子に座り、新聞を読み始めた。

「この寒さは今後も続くと思われっ」「ピッ」

女性はテレビのリモコンを向けテレビを消した。

「本当に嫌ですわこの天気。寒さだけじゃなくて空も気味が悪くて」

「確かに。こんな雲の様子はわしも今まで見たことがないのう。ジムはもう出たのかね？」

「はいついさっき」

「まったく、朝ぐらいゆっくりしていけばいいものを」

「この頃かなり忙しいみたいですよ」

「わしのように仕事ばかりにならんといいが」

「心配いりませんわ。それにお父様だってちゃんと家庭を大切にしていたって聞いていますわ」

「いやいやそんな事はないんじゃが」老人は照れくさそうに新聞で顔を隠した。「子ども達は？」

「さっき呼んだんですけど。まったく、あの子達はいつになったら、

自分達で起きる事を覚えるのかしら」
そう言うと、母親は一旦コンロの火を止め二階へ上がっていった。
ドンドン。
「早く起きなさい。もう八時よ。早くしないと入って叩きおこすわよ」
ドアがゆっくりと開いて、二人の男の子が出てきた。二人とも眠たそうに目をこすっている。顔がそっくりの双子だ。二人は母親についで降りていった。
「まったくこの子達ったら」
母親の後ろから二人がちょこんと顔を出した。
「おはよう」老人は新聞をたたみ、子ども達に向かって挨拶した。
「おはよう。おじいちゃん」二人の声が揃っている。
子ども達が席に着こうとしたその時。急に家が大きく揺れ始めた。
「大変。地震だわ。みんな急いでテーブルの下へ」母親が叫んだ。
しかし、次の瞬間。部屋中の電気が消え、そして―
みんな一斉にゆっくりと目を覚まし始めた。奇妙なことに全員が立ったままであった。
「いっ。何が起きたのかしら?みんな大丈夫なの?ノア?リアム?お父様?」
頭を押さえながら母親が言った。
「わしは大丈夫じゃ。少し頭は痛いが」
「あなた達は大丈夫なの?」
「何ともないってば。ママ」
ソフィアは二人に近寄って、体中を触りながら安心したように抱き寄せた。
「本当に大丈夫なのね?よかったわ」
「何だったのかの」
「分かりませんわ。私達みんな少し気を失っていたみたい。しかも立ったまま。確か地震の後、急に意識が……」
「わしもじゃよ。外の様子を見に行こう。お前達はここにいなさい」

外の様子を確認しに二人は外に様子を見に行った。隣人も外に出て確認しているようだが、いつもと変化がない。ただあの雲を除いては。不気味な雲は跡形もなく消え、真冬とは思えないほどの太陽が地面を照らしていた。

「本当に気味が悪いわ。この空なんなの。雲一つ無くなっているわ。それにあれだけ大きな揺れを感じたのに何一つ変わったところがないなんて」

「そうじゃのう。だが、周りも地震の影響も受けていないようじゃし、気にせんほかなかろう。さぁ中に入ろう」

そう言うと二人は家に入っていった。周りの隣人達も不思議そうな顔をして家に戻っていった。

「ねぇねぇ何だったの？地震？家たおれてたの？」

「何にも変わってなかったわよ」

「なんだなんだ。つまんないの。何だったの？」

「本当に分からないわ」

「のうソフィアさん。それより、わしは少しお腹がすいたんだが」

「僕もママ」

「はいはい。じゃあ急いで今から作りますね」

母親は再びエプロンを着てキッチンへ入っていった。

「でも、やっぱり気になるわ。こんな不気味な事初めてだし。あの人も無事だといいんだけど」

スクランブルエッグを作ろうと、フライパンに火をつけた。ボッ。

「あらやだ。火を強くつけすぎたかしら。おかしいわね。」

西暦二〇一二年十二月二十一日。八時～八時一分十七秒。

この日人類は滅びた。いや、新たな進化の段階を迎えたのかもしれない。新人類誕生の瞬間である。

第2章　子ども達への手紙

西暦二〇二〇年六月十二日。アメリカ、ニューヨーク市現在。
マレーヒル三十四番通り四番地の住人スミス一家は、周りの住民達から見ると、これ以上ないくらい完璧な家族だった。
スミス氏の職業は、対能力犯罪組織の支部長である。筋肉隆々の体つきで端整な顔立ちに、頬には大きな切り傷がある。スーツ姿がいかにも逞しい夫らしい。スミス婦人は、細身でとても美しかった。結婚前には、モデルをしていて、子供を生んだ後も完璧とも言えるスタイルを維持していた。子供の躾まで完璧。息子のイーサン・スミスは、現在十一歳。髪の色は黒くクシャクシャな癖毛。ハシバミ色の目に端整な顔立ちで、近所でも評判の優等生である。その上、スミス一家は、スミス夫人の妹であるエレン・ウォーカーの息子を預かって育てていた。

ジャスティン・ウォーカーは十歳。もうすぐイーサンと同じ十一歳になる。透き通るような青い瞳が印象的で、髪はブロンドで短髪。額にはニキビができはじめたようである。この年頃の子供にしては、背は低い方で痩せている。スミス家の二階のある寝室のベットで眠っていると、いつも通りドアを叩く音と同時に、礼儀正しい声が聞こえてきた。
「もう七時ですよ。早く起きて、着替えてきなさい」
「はい。叔母さん」
返事をしながら、ジャスティンは今見た夢を思い出していた。時々見るこの夢。僕はまだ赤ん坊で、ベビーベットに寝ている。誰かが僕の顔を覗き込む。僕と同じ青い目だ。大きな音が聞こえてきて、・・・その後がいつも思い出せない。
「いっって」
着替えてドアを開けると同時に、何かが顔面に飛んできた。足下

を見るとテニスボールがあった。
「よぅ、寝坊助。今日もなさけねぇ顔だな。目は覚めたか？」
イーサンは、満足そうな顔をしてテニスボールを再び宙に浮かして遊んでいた。
「おかげ様でね。この借りは返すからね」
「それは楽しみだ。今まで俺への仕返しが何回失敗に終わった事か。今や、お前の能力が現れる確率より低くなってるぞ」
ニヤニヤしながら、イーサンはさっさと一階に降りて行った。
「ジャスティン。早く降りてきなさい」
僕は、小声でぶつぶつ文句を言いながら、降りていった。
いつも通りリビングには、新聞を片手にコーヒーを飲むスミス氏。
イーサンは座って何か難しそうな本を読み始めている。
「おはようございます。叔父さん」
「おはよう、ジャスティン」
いつもどおりの素気ない返事だ。叔母さんは朝食を並べている。
「ジャスティン、さぁ座って」
「はい叔母さん」
朝食が食卓に並びんだ。叔母さんも席に着いた。
「いただきます」
いつも通り。食器の音だけがリビングに響く。
カチャカチャ。
僕は、三歳からこの家族の一員だ。僕はスミス夫妻に感謝している。事故で両親を亡くした僕を、息子のイーサンと同等に育ててくれたのだから。いつも豪勢な食事。不自由ない生活。でも本音を言えば、正直寂しかった。近所の子供は、親に叱られたり、騒がしい毎日を送っている。スミス氏家の会話はどこか寂しい感じがする。何となくだけど。叔母さんは厳しいけど、常に丁寧で礼儀正しい。叔父さんはほとんど仕事だ。唯一よかった事はイーサンだ。イーサンは、親のために、親の前でも近所でも優等生を演じている。でも、実際は違う。本当は明るくて、口が達者で、イタズラ好きだ。イー

サンは従兄弟だけど、本当の兄弟のようで、親友だ。歳も同じだし。そんなイーサンにスミス夫妻は気づくことがない。イーサンは何も気にしてはいないようだ。でも、僕は少しこの家族に違和感を感じていた。

「そういえばあなた。訓練所からの入学案内が届くの今日じゃなかったかしら。」

「確かそうだったかもな。」

「イーサン、郵便を取ってきてちょうだい。」

「はい、お母さん」

イーサンは、すぐさま郵便を取りに行った。

「はいこれ。父さん宛の分だよ。能力訓練学校からの入学案内も届いてたみたいだよ。こっちはジャスティンの分だ」

僕はイーサンから手紙を受け取って、差出面を読んだ。白い封筒にエメラルド色のインクで宛名が書かれてあった。

ニューヨーク州　マンハッタン
マレーヒル三十四番通り四番地

ジャスティン・ウォーカー様

封筒の裏は十字架と剣がクロスされた絵の紋章入りの蝋で封がしてある。中は一枚の紙が入っている。さっそく読み上げた。

エンパイア・ステイト能力訓練学校

校長　グレゴリー・ブラウン

拝啓　親愛なるウォーカー殿

この度、エンパイア能力訓練学校への入学を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。

八月一日に、制服の新調及び能力判定試験を、本校にて午前九時より行います。教科書は、一年生の能力判定後、必要教科の教科書を配布致します。

寮費、学費、教材費、制服代の詳細と振込先を後ほど保護者の方へお送り致します。保護者の方に必ずお伝え下さい。

入学式は、九月一日十時に開式となります。新学期は、翌日に始まります。六月一日に始まる夏休みまでは、寮で暮らす事となります。

貴殿の入学を心よりお待ちしております。

敬具

副校長　デイビス・ハワード

「八月一日か。お父さん。校長と副校長は、どんな先生ですか？」

「・・・ん？そうだな。校長とは、古い友人だ。とても人望が厚い方だ。副校長は、高レベルのエスパーとは聞いた事があるが、まだ会った事はないな」

「そうなんですか。高レベルのエスパーはかなり珍しいんですよね。政府が認知している十賢者とかを含めてもレベル五以上のエスパーは世界に二割くらいしかいないって言われてるし。副校長に教えてもらいたいな」

「まぁ、どの先生も素晴らしい先生だろうから、頑張る事だ。私達と違ってお前達は、能力を訓練する事で能力値もあがるからな。ん

？ジャスティンどうした？」
「一年生の能力判定後・・・」
僕はその言葉に釘付けになっていた。
イーサンは笑いそうになるのをばれないよう必死だ。スミス夫妻は全く気づかない。
「ジャスティン、そんなに緊張しなくても大丈夫だ。誰にでも必ず能力はある。さっきも言ったが、お前達の能力はある程度鍛える事が可能だ」
「・・・はい。ありがとうございます。叔父さん」
「いかんこんな時間だ。行かなくては」
「もうですか？」
叔母さんが、慌てて鞄と上着を用意した。
「最近の能力者による犯罪は増える一方でね。何とか他の支部と協力しながら、抑えてる状態だから、私の担当地区が平和な日でも、休める日がなくてね。行ってくるよ」
「いってらっしゃい」
叔父さんを見送った後、僕とイーサンは二階に上がり、叔母さんは後片付けを始めた。
「能力判定だってな。そういえばジャスティンはどんな能力が使えたんだっけ。七年以上一緒にいても見たことないような」
「うるさい」
テニスボールを投げつけたが、イーサンの顔面の前でボールは止まって、落ちた。
「まぁ、何か能力はあるさ。今の時代、能力のない人なんて聞いたことないしな。もし、いたらある意味凄いぜ。世界初かもな。楽しみだな」
またボールを投げる前に、イーサンはニヤニヤしながら、部屋に入ってドアを閉めた。
確かにイーサンの言うとおりだ。僕は何の能力も出た試しがない。多少物が揺れたりした気もするが、たぶんそう見えただけだ。本当

少しだし。

そういえば、叔父さんと、叔母さんの能力も見たことがない。きっと戦闘向きの能力か、そんなに日常に必要のない能力だろう。僕の能力はいったいいつになったら現れるんだ？もうすぐ十一歳なのに。

ずっと待ちに待っていた入学がこんなに恐ろしくなるとは思ってもいなかった。

第3章　覚醒

「ジャスティン・ウォーカー」
黒髪で短髪の男性が僕の名前を呼んだ。顔はよく見えない。大勢の子ども達と一緒に、僕とイーサンはホールに並べられた椅子に座っていた。僕はイーサンの隣で席から立ち上がった。
「はい」
「ありえない事だが、君には全く能力がない事が分かった。残念ながら、入学を許可できない」
隣にいるイーサンを見ると下を向いて肩を震わせている。
「そんな、嘘です。もう一度調べてください。入学不可なんて、お願いです。もう一度検査して下さい」
「それはできないのだ」

ドンドン。ドアをノックする音が聞こえてきた。
「早く起きろよ。今日はサッカーするんだからな」
「分かってるよ」
嫌な夢。入学案内が着てから、いつもこの夢だ。今日もサッカーの約束だっけ。小学校を卒業して休みに入って、暇があればサッカーばかりだ。明日は僕の誕生日。その次の日は能力判定なのに、まだ能力に目覚めない。あの夢が現実になったらどうしよう。
鏡を見ながら、ジャージに着替えた。
「にきびがひどいな。早く治らないかな」
額のにきびを触っていると、額にうっすらとアザが見えた。
「なんだこの変な模様のアザは?昨日までなかったのに」
しかし間もなくその模様は跡形もなく消えた。
「なんだただの寝跡かな」
「ジャスティンまだか?」
イーサンがリビングから叫んでいる。

「はいはい。今行きますよ」
急いで着替えて、リビングに降りていった。
「おはようございます」
「おはようジャスティン。さぁ席についてね」
叔母さんは朝食を並べている。叔父さんはコーヒーを飲みながらニュースを見ている。イーサンは早く食べたそうにそわそわしている。横目で早く座れと言いたげだ。
「おはようございます。叔父さん」
「おはよう。今日もサッカーか？」
「はいそうです」
「遊ぶのも程々にな。小学校で習ったことは、能力とは関係ないが将来に役立つ。復習も忘れないようにな。イーサンもだぞ」
「もちろんです。お父さん」
「よろしい。では、いただきます」
「いただきます」
いつも通りの、静かな食事。できるだけ、急いで食べているように見えないように食べた。イーサンもそんなふうに見える。
「ごちそう様でした。おいしかったです。じゃ行ってきます」
「いってらっしゃい。寒いから気をつけなさい」
「はい。お母さん。十二時には戻ります。行ってきます」
二人揃って家を出た。出た瞬間、二人とも走り出した。この前、公園に行った時は、広場先客がいて、使えなかった。公園以外のいい場所を探すのに時間がかかった。僕が寝坊したからだ。今日はきちんと起きれたし、大丈夫なはずだ。
マディソン・スクエアパーク。やっと、着いた。誰も来てないように見えた。見当違いだった。二人で広場に行くと、またしても先客がいた。この前と同じ二人だ。
ゲイリー・トーマスとルーカス・スチュアート。二人共僕達の一つ年上だ。ゲイリー・トーマスは、ずんぐりとした体形で、お腹は服からはみ出ている。金髪で、首がほとんどなく、ぴったりな言葉

は豚だ。サッカーをどうやってしているのか永遠の謎だ。ルーカス・スチュアートは、背が高く、がっちりした体形だ。顔はそばかすだらけだが、冬でも日焼けしていてよく見ないと分からない。

この二人と僕達は、小学校の頃から犬猿の仲だ。二人は、広場を占領して、一対一をしていた。

「おいゲイリー。僕達この広場使いたいんだけど。少し場所分けてくれないかな」

イーサンが勇敢にも、話しかけた。二人は、一対一を止めてボールを右腕に抱えて、近づいてくる。

「残念だったな。見ての通り、僕達が先に使っている。他を探しな」

「こんなに広いじゃないか。たった二人全部は使わないだろ?」

「いや使うな。お前達はチビで下手くそだから狭い範囲で十分だろうが、僕達の練習にはこのぐらい必要なんだ」

「よく言うよ。そのでっかいお肉抱えて走るので精一杯のくせに」

「なんだと?もう一度言ってみろ」

「いいさ何度でも言ってやる。そのお肉を抱えて・・・」

イーサンの口が閉じた。ゲイリーは、右手を口を閉じさせるように動かしていた。そして手を放すと

「ぷふぁ・・・なんだ?」

「見たか。人体操作だ。今は自分の操作がメインで、他人にはこの程度だが、もう少し鍛えればお前を好きなように操れるぞ」

「そんな事できるもんか。僕達はこの腕にはめているリミッターで監視されているじゃないか」

僕は二人の会話に割り込んだ。

「違うな。確かにこのリミッターで監視されているのは確かだが、罰を受けるのは法を犯すほどの事をした場合だけだ」

「そうなの。イーサン?」

僕はイーサンの方を向いた。

「確かにその点は正しい。でも、おバカさんは知らないようだが、能力にも相性がある。他人への直接のサイキックは、サイキックの

能力者同士の場合、能力値の差が余程ないと鈍くなる。効果も使用時間もね。でもその点、俺の物体操作はそんな事に左右されないけどね」

イーサンはそう言うと、ゲイリーの抱えていたサッカーボールに手を向け、ゲイリーのあごにボールを直撃させた。ゲイリーは、倒れそうになったが、倒れる直前に制止し元の態勢に戻った。

「いってぇな。思いしらせてやる」

イーサンとゲイリーが戦態勢に入った時、間にルーカスが割り込んできた。二人の胸に手を当てている。二人とも全く前に進めないようだ。二人とも一歩後退した。

「止めるな。ルーカス」

「まぁ落ち着けゲイリー。どうだろう、今から二対二をして勝った方がこの広場を使えるってのは」

「ふん。それなら、まぁいいよ」

イーサンはまだ怒りながらも、同意した。

「なぁゲイリー。いいだろ」

ルーカスはゲイリーにウィンクをしながら言った。イーサンは気づいてないけど、僕は確かに見た。

「仕方ないいいだろう」

ゲイリーも、にやけながら同意した。

「じゃあ先に二点を先取した方の勝ちだ。コートは、君達用にハーフコートだ」

「いいよ。オールコートで」

イーサンは挑戦的だ。

「分かった。では準備して始めようか」

ゲイリー達と離れて僕はイーサンに話しかけた。

「奴ら。何か企んでる」

「望むところだ。大丈夫。奴らの練習の様子見ただろ？大したことないって」

「始めるぞ」

僕達は、センターに立って準備した。先行は奴らだ。二対二だから、マンツーマンでの勝負だ。キーパーはなし。

スタートと同時に、ゲイリーがルーカスにパス。僕はルーカスに、イーサンはゲイリーについた。

電光石火。二人に近づけたのも一瞬だった。ルーカスは、信じれない速さで僕を軽く突き放した。一人で十分だったろうに、わざとらしくゲイリーにパス。ゲイリーは、そのパスに巨体とは思えない程の早いターンで応えた。イーサンも予想外だったようだ。追いつく暇もなく・・・

「俺達の先制だな。あと一点だ」

二人はハイタッチをしている。

「汚いぞ。能力を使うなんて。サッカーはスポーツだ」

イーサンは顔が真っ赤だ。

「俺がいつ能力禁止だと言った？」

ルーカスは、イーサンに自慢げに言った。

「いいさそういう事なら。見てろ。早く始めるぞ」

僕が、イーサンにボールをパス。イーサンは、相手ゴールに運ぼうとした。ゲイリーがイーサンにつく。どうやら足の速さは人並みだ。機敏さは異常だが。普通あんな動きはできない。ゲイリーは奇妙な動きで、イーサンからボールを奪った。

しかし、次の瞬間。ボールは、ゲイリーの足元から跳ね上がり、ゲイリーの顔に直撃。奇妙に跳ねながら、ゴールへ向かう。ゲイリーとイーサンが、必死に追いかける。イーサンはボールには追いつくが、予測不可能なボールを捕らえられない。そして、・・・

「くそっ」

「どうだ。忘れてらっしゃいますが、サッカーは、ボールをゴールに運ぶスポーツだ。物質操作ができる俺に能力許可を出すからだ」

ルーカスは、イーサンに何やら話しかけた。それを聞いてイーサンは、意地悪い顔でこっちを向いた。

「早く始めようぜ」

「気をつけないとイーサン。また何か企んでるぞ」
「平気だってジャスティン。奴らが、何を企んでいても、俺はボールを自由にできるんだからな」
「そうだけど」
「さぁ行くぞ」
ゲイリーがルーカスにパス。でも、ボールは真っ直ぐパスされず、奴らのゴールへ飛び跳ねながら向かう。またしても、ルーカスが凄い速さで動いた。でも向かう先は・・・
ドーン。イーサンは、ルーカスに体当たりされ、地面に倒れた。
「いってぇ」
イーサンの膝から血が出ていた。ゲイリーが操作の解けたボールをキープして、こっちを楽しそうに見ている。
「大丈夫か?手加減はしたんだがな」
「ふざけるな。今のは完璧に反則だ」
僕は、ルーカスに喰ってかかった。
「反則も有りだ。ちゃんと最初に確認すべきだったな。それにお前が助ければよかったじゃないか」
僕の顔は真っ赤になった。
「そういえば、お前にはまだ能力がないんだったな」
「黙らないとお前に車をぶつけるぞ」
イーサンが、膝をかばいながら起きあがった。
「ふん。できもしないだろ。ジャスティン、お前確かもうすぐ十歳だったな。能力は、三歳から十一歳までに決まる。まだ能力に目覚めてないのか。お前みたいな奴、始めてみるぜ」
次の瞬間。ぴったりな言葉はこれだ。キレてしまった。僕は、頭に血が上るのを感じた。顔は多分真っ赤だ。感情を制御できない間隔。不可能でも、とにかくルーカスをボコボコにしてやろう。
でも、僕の身体が動く前に、不思議な事が起こった。僕の周りの風が、意志をもったかのように僕の周りを動き始めた。風をとても身近に感じた。そしてその風が、一気に、ルーカスとゲイリーの方

へ放たれた。突然の出来事に二人は成す術もなく、倒れた。そして、ボールは風に運ばれ、奴らのゴールへ。

この出来事に誰が一番驚いたか。もちろん僕だ。

「ふざけやがって」

二人が僕に向かってくる。でも、風が二人の邪魔をして全く動けない。風が止むと二人は息を切らしていた。

「覚えてろ。この借りは学校で必ず返すからな」

ゲイリーとルーカスは、急いで広場を去って行った。

キレた事など忘れて、気が付くと身体はクタクタで、僕は地面に倒れた。イーサンが、僕に近づいてきた。

「ジャスティン、やったじゃないか。今のどうやったんだ？」

「自分でも分かんない」

「ジャスティン、今のは確実にサイキックだ。覚醒したんだよ。しかも、お前は風を操れる。四元素を操れるなんて珍しいんだからな。やったな」

イーサンは、自分の事のように嬉しそうだ。そんなイーサンを見て、僕も思わずにやけてしまった。

「まぁ思ったより大したことなかったけどね」

第4章　十一歳の誕生日

その日の夜。ジャスティン・ウォーカーは眠りについていた。

僕は、信じられないくらい青くて広い空を飛んでいる。下の街がほとんど点に見えるぐらい高く飛んでいる。僕の左前方には見た事のない鳥の群れがいる。速いな、よし。僕は風に念じ、スピードを上げ、あっという間に鳥の群れを追い越した。

すると周りが暗くなり場面が変わった。どこだここは？僕はいつの間にか地面に立っていた。すると後ろから声が聞こえてきた。

「実験が成功しました」

周りが暗い。地下の廊下みたいなところだ。二人の男性が話している。一人は、僕と同じブロンドで背は高く、白衣を着ている。歳は三十代後半。顔が疲れてみえるせいか、実際より歳をとっているように見えるのかもしれない。しかし、顔は喜びに満ちている。もう一人は、同じくらいの身長で黒髪。顔を見ると歳は五十代に見える。しかし、白髪もなく背筋がまっすぐしていてスーツをきているせいか、しっかりしていて若く見える。いかにも政府の人間みたいなオーラだ。

白衣を着た男が続けて言った。

「ある特定の音波を使えば、成人後でも能力の覚醒が可能です」

「そうか、ごくろうだった」

落ち着いた低い声が響きわたった。

「しかし通常、能力は成人前に目覚め、能力値が決まってしまうのです。能力を無理矢理覚醒させる事はできても、あの子達のように複数の能力を使う事も、能力値を上げる事も不可能です。能力の使い方を鍛える事はできますが」

「そうか、それは残念だ。しかし、成人後、誰であっても能力は目覚めるのだな」

「そうです」

「素晴らしい。よくやってくれた博士。人類が今まで決して得る事ができなかった力を誰もが得る事ができるとは。早速軍人を対象にその方法を試してみてくれたまえ」
「分かりました。一般人への公開はどうしますか」
「一般人への公開？そんな事はしない」
白衣の男の顔色が変わった。
「そんな。なぜなんですか」
「博士。君ほどの天才が分からない訳がないだろう。そんな能力を一般人が手にした世界を想像したまえ。世の中が犯罪者だらけになる事は目に見えている。しかも、一般人に公開し、その技術が他国に渡れば、我が国の研究が自らを苦しめることになる。我が軍だけに使用し、世界一の軍事国家としての位置を不動のものとすることが最善なのだ」
「しかし、この技術は人類の大きな進化の一歩なのです。あの子達も普通の生活を送れるようになる。この技術を留めておく事は科学への冒涜であり、不可能な事です」
「いや、可能なのだ。我々がそう考えればな。この話はもう終わりだ」
スーツの男は、博士に背を向けて行ってしまった。博士はしばらく落胆していたが、何かを決意したかのような顔をして、スーツの男とは反対の方へ去って行った。

ジャスティン・ウォーカーは、目を覚ました。
さっきの夢はなんだったんだ？リアルな夢なら何回か見たけど、それでも自分が見た事のない人の夢まで見るなんて。起き上がると足元にはプレゼントが２つ置いてあった。今日はジャスティン・ウォーカーの十一歳の誕生日である。ついさっき変な夢を見たことなど忘れて、無我夢中でプレゼントを開け始めた。
大きい箱の中にはサッカー・ボールが手紙と一緒に入っていた。手紙には「もっとうまくなれよ。誕生日おめでとう」と書かれてい

る。

「イーサンめ。本当にサッカーバカだよな」

もう一つの小さめの箱には手紙が挟んである。スミス夫妻からだな。手紙には「これはあなたのお母さんが持っていたものよ。大事に使って下さい。それと私達からは、時の砂時計を。上手に使って下さい。お誕生日おめでとう。マディソン・スミス、エレナ・スミス」と書かれてある。

箱を開けると一本の万年筆とボトルインク、砂時計が入っていた。黒くて細長い万年筆には、金色の文字でエレン・ウォーカーと書いてある。少し古くて色あせていたけど書いてみるとしっかりと書けた。軽くて使いやすい。こんな立派な万年筆を使っていたなんて、小説家か何かだったのかな。母さんは、僕が三歳の頃に交通事故で死んだ。小さい頃「何で僕のお母さんは死んだの？」と聞くと叔母さんはとても悲しそうな顔をして僕に教えてくれた。それ以来、叔母さん達に母の事は聞けないでいる。父は、母が僕を生んだ時には既にいなくて叔母さん達もよく知らないようだ。

砂時計を立ててみると金色の砂が流れ始めた。なんだろうこれ。ただの砂時計と何が違うんだろう。取扱説明書のようなものが入っていた。

『時の砂時計』

この商品は、使用者のスピリットを込める際に、条件を念じることによって、その時間を狂うことなくぴったりに知らせる砂時計です。・・・

なんだか難しそう。多分これ念具だよね。確か、使用者のスピリットをある念動力に変換してくれる道具。でもまだ僕はスピリットもよく分かってないし。まぁいつか使えるようになるまではとっておこう。

「ジャスティン。朝食よ。降りてらっしゃい」

一階からおばさんの声が聞こえてきた。プレゼントを急いでしまってリビングに降りていった。今日はいつにもまして豪華な朝食だ。僕の大好きなカリカリのベーコンにウィンナー。スクランブルエッグにトーストにワッフルに色々ある。

「おはようジャスティン。お誕生日おめでとう」

「おはようございます。プレゼントありがとうございます。叔父さんは？」

「あぁ・・・あの人はちょっと仕事でね早めに出かけたの。あなたによろしくって言ってたわよ。さぁ座って。今日は午後からお友達を呼んでお誕生日パーティーですからね」

「本当にありがとうございます」

「何言っているの。気を遣わないでちょうだい」

イーサンの隣に座ると、イーサンが小声で話しかけてきた。

「俺からのプレゼントはどうだった？お前にぴったりだろう？」

「そうだね。まぁ君程度なら、すぐに追い越すけどね」

「まぁいいさ。今日は誕生日だからな。特別に許してやるよ」

そう言うとイーサンは黙って朝食を食べ始めた。僕も食べ始めた。好物がいっぱいだ。まずはベーコンだな。本当に叔母さんの料理は美味しい。僕の母さんはどうだったのかな・・・

「ジャスティン。お誕生日おめでとう」

午後からは友達を招いての誕生日パーティー。お菓子にカードゲームにおもちゃ。後でゆっくり見るのが楽しみだ。叔母さんの手作りチョコレートケーキに豪華な食事。本当に美味しい。もう動けないくらいおなか一杯に食べてしまった。パーティーももうすぐ終わりそうな頃家のベルがなった。

「あら誰かしら。パーティーはもうすぐ終わりなのに」

叔母さんはそういうと玄関へ向かっていった。

戻ってきた叔母さんは少し複雑そうな顔に見えた。腕には包装された小包を抱えている。

「ジャスティン。あなたによ。けれども送り主が分からないの。検査を受けているから怪しいものではないとは思うんだけど」

小包には手紙が挟んであった。見慣れない細長い文字で「お誕生日おめでとうジャスティン」とだけ書かれてあった。裏を見ても何も書かれていない。箱を開けると、そこには今まで見たこともない針が二つついた黄金色のコンパスがあった。

第5章　能力判定

誕生日の夜。お腹いっぱいに美味しい料理を食べてすぐに叔母さん達におやすみの挨拶をして部屋に向かった。ベッドに横になって不思議なコンパスを触りながら考えていた。イーサンが言うにはこれも念具のようだ。大抵の念具や装具は旧世界の道具を少し改造したものらしい。だから少し旧世界の道具と違うことが特徴らしい。二つ針のコンパスなんて旧世界にはない。だいたいこの手の念具は、持ち主が条件を指定して動かすみたいだ。コンパスだから何かの方向を指すんだろうな。でも説明書もなかったし。僕にこのコンパスをくれたのは誰だろう?なんで僕に?僕のことを知っている人・・・父さん。ふと父さんのことが頭によぎった。けれど父さんは生きているかも分からない。今までずっと連絡もなかったのに急に送ってくるなんて変だ。それに父さんなら名前を書くはずだ。会いに来てくれてるはずだ。・・・でもだとしたら誰なんだろう。僕には友達以外にプレゼントをくれる人なんて思い浮かばない。それに念具や装具はとても高価だ。いったい誰が・・・

「早く起きろよ。今日は学校に行く日だって事忘れたのか」

ふと目が覚めるともう朝だった。どうやら寝てしまったようだ。今日は珍しくイーサンが起こしに来た。

「分かってるよ」

「早く着替えて、降りてこいよ」

イーサンが、一階へ急いで降りていく音が聞こえる。よっぽど嬉しいんだろうな。

「おはようございます」

叔母さんが、朝食を並べているところだった。

「おはよう、ジャスティン」

僕は席に着いた。叔父さんは今日もいない。

「叔父さんはどうしたんですか？」
「仕事よ。大丈夫よ、学校へは私が一緒にいきますから」
「そうなんですか」
「それじゃあ、食べましょう。いただきます」
「いただきます」
食器の音がリビングに響く。けれど何だろう。今日は、少し明るい感じがする。
「そういえば、ジャスティン。何か考え事？能力判定試験の事なら能力が覚醒したんだから心配はないわ」
「・・・あっいえ。大丈夫です」
不意に聞かれて驚いた。食事中の会話も珍しかった。でも、それ以上にまたプレゼントの送り主のことを考えていた。でも叔母さんのプレゼントを見た時の驚いた顔と言ったら。叔母さんの前であのコンパスの話は止めておこう。それにいくら考えても分からないし。
「そう・・・昨日は二人とも良く眠れた？」
僕とイーサンは一瞬目を合わせてそらした。
「はい。お母さん」
「僕もよく眠れました」
「緊張していないみたいで良かったわ。能力判定と言っても形式的なものだから。それじゃ、ごちそう様。二人とも支度してらっしゃい」
「ごちそう様でした」
俺とイーサンは、急いで二階へ上がった。部屋に入る前に、イーサンが聞いてきた。
「どうしたんだろうなお母さん。それにジャスティン何か、考え事か？昨日のコンパスか？」
「うーん。昨日も考えてたんだけど全然心当たりがなくて」
「まぁ考えても仕方ないさ。いいものもらったんだし、うまく使えよ」
「そうだね。分かった」

「支度はできたの？」
一階から、叔母さんが叫んでる。
「やばい。早く着替えるぞ」
急いで、着替えて一階に降りた。叔母さんはもう玄関で待っていた。
「さぁ。行きましょう」
三人で家を出て、歩き始めた。
「学校がそんなに遠くなくて良かったわ。能力学校は、州ごとにまだ1つしかできてないから」
「そうなんですか？お母さん」
「そうよ。エンパイア・ステイト能力訓練学校は、一番大きい学校として有名だけど、まだ創立してそんなに経っていないわ。二〇一二年から五年後に創設されたから。旧コロンビア大学とニューヨーク市立大学を併合して出来たのよ。あなた達は第三期生ね。今の四年生から七年生は、創設時に途中入学してるわ」
「そうなんですか。でもそれまで大学生だった人達は？」
「そうねぇ。詳しくは分からないけれど、二〇一二年以来混乱期を迎えて能力や法律、職業、施設とかを整備するのに政府は時間がかかったようね。今でもまだ問題は残っているけど。当時成人していた人達は急に能力に目覚めていろいろ大変だったわ。二〇一二年時点で成人だった人達は、能力の基礎的訓練とそれに応じた職に就かされたの。今では大分整理されて自由に職を選べるようになったみたいだけど。私は詳しくは知らないから。歴史も学校できちんと教わると思いますよ」
二人の会話についていけないので一人で街を眺めながら歩いていた。エンパイアステイトビルを通り過ぎた。何回見ても高いなぁ。
少し歩くとペンシルベニア駅に着いた。駅は通勤する人達であふれていた。はぐれないようになんとか地下鉄に乗れた。十五分ぐらいすると「エンパイア・ステイト能力訓練学校前」に到着した。
「学校は確かこっちよ」叔母さんを先頭に歩いていく。

けどもうそろそろ疲れてきた。こんなに遠くに来たのは初めてだ。五分くらい歩くと、学校の校門が見えてきた。正門を通り過ぎると、圧倒された。まずこの広さに驚いた。これ全部が学校なんて。全部見えない。色んな形の大小様々の建物が立っている。すごく古い建物から新しい建物まで。色々な銅像が立っている。並木道に広場、公園にお店まである。ちょっとした街みたいだ。目の前には、壮大な建物が建っている。これが多分校舎だと思うけど。大きな扉の階段下には、大きな噴水がある。

「昔の大学とそんなに変わっていないみたいね。規模は大違いだけど。さぁ行きましょう」

俺達は、周りを見るのに精一杯だった。

「早く着いてきなさい」

イーサンに小突かれ、僕は叔母さんについて校舎にはいっていった。天井がものすごく高い。入口に入るとすぐに女性の人が話しかけてきた。

「入学生と保護者の方ですね。こちらで、受付をお願い致します」

「はい。分かりました」

叔母さんが、何か書いているのを僕達は後ろで黙って見ていた。

「ありがとうございます。ではこちらへどうぞ」

女性について僕達は歩き始めた。やけに長い。道も複雑で、迷いそう。校舎内の移動はイーサンと一緒にしなくちゃ。

「こちらでお待ちください」

女性は行ってしまった。叔母さんが扉を開けた。大広間にたくさんの子供達が椅子に座って、並んでいる。保護者達は、子ども達の後ろの方に座っている。

「じゃあ、また後でね」

叔母さんはそういうと保護者達の席の方へ行ってしまった。

「じゃあ、俺達もいくか。ジャスティン」

イーサンと一緒に空いてる席を探した。見つけた。女の子の隣二席がちょうど空いている。

「ここいいかな?」
僕はその女の子に聞いてみた。
「えっ?もちろんいいわよ」
女の子がこっちを向いた。茶色の真っ直ぐな髪に、茶色の目。とても可愛い顔をしている。見た瞬間、僕は少し赤くなった。イーサンに気づかれてませんように。
「座らないの?」
「早く座れよ、ジャスティン」僕は女の子の隣に座った。
「私、イザベラ・テーラーよ。よろしく」女の子が手を出して握手をもとめてきた。
「僕は、ジャ、ジャスティン。・ウォーカー。よろしく」僕も手を出して握手した。汗かいてないかな。
「俺は、イーサン・スミスだ。ジャスティンとは従兄弟」
「そうなの?従兄弟の割に似てないのね。よろしくね」女の子はにっこり笑いかけた。とても可愛い。
するとイーサンが小突いてきた。幸い女の子は前を見ていて気付かなかった。
「ねぇ。能力判定ってどんなことするのか知ってる?」女の子が聞いてきた。
「うーん。俺たちもよく知らないんだ。形式的なものとは聞いたけど」イーサンが答えた。
「そうなの。私はこの能力判定をもとにしてクラス分けされるとは聞いたんだけど」
「クラス分け?そうなんだ」僕は少しがっかりした。イーサンと同じクラスになれるのかな。それに・・・
「ところで二人の能力は何なの?」
「まずは、自分から言うべきじゃないか?」イーサンがいじわるそうに聞き返した。
「それもそうね。私は感覚活性で目覚めたわ」
「感覚活性ってどんな事ができるんだ?」

「今度はあなた達の番よ。能力は？」
「俺は、物質操作だ」イーサンが早々と答えた。
「僕は、風の操作」僕は細々と答えた。
「そうなの？」
イザベラはかなり驚いている。
「物質操作も四元素の操作も、かなり珍しいわ。まぁ前例がない訳じゃないけど」
「そうなの？前例って？」僕が聞き返した。
「で。感覚活性ってなんだ？」イーサンが割り込んできた。
「ねぇあなたってせっかちって言われない？」
「言われたことないけどね」
「あっそう。そうね。人間には五感があるでしょ？視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚は知ってるわよね？感覚活性は、それらを活性化させるの。全体の感覚が、普通の人より上がるんだけど、五感の中の一つが特に上がるのが一般的ね。私の感覚が一番鋭いのは視覚よ」
「それってどんな役に立つんだ？」イーサンはからかったように聞いた。
「あら役に立つわよ。例えばそうね。あなたの歯の奥に今日食べたベーコンが残っているとかね」
イーサンが口を隠して真っ赤になった。イザベラは、自慢げにっこりした。イーサンを口で負かす女の子なんて初めて見た。
「イザベラは、頭がいいんだね」
僕がそういうと、イーサンが睨んだ。
「ありがとう。あらやっと今から説明が始まるみたいよ」
イザベラが向いた方を見ると、広間の上座の中央に男性が上るところだった。歳は三十代前半に見える。背が高く、黒髪で短髪。鼻の下と顎に髭が生えている。一見、優しいそうだけど、厳しそうにも見える。どこかで見たような気もする。けれど思い出せない。
「はじめまして。入学生のみなさん。副校長のデイビス・ハワードです」

「例の高レベルエスパーだ」イーサンが囁いた。
「早速ですが、今から制服の新調と能力判定試験を行います。呼ばれた順に、あちらの扉へ入って下さい。能力判定では、主要能力及び補助能力の種類と、それらの能力の潜在能力値を測定します。終わった方から、各自解散と致します」
「主要能力と補助能力って何だ?」イーサンがイザベラに尋ねた。
「私も知らない。能力が複数あるみたいな意味に聞こえるけど」
「ではアリシア・ケリーと・・・」
名簿らしきものを見ながら、デイビス先生が五人の名前が呼んだ。呼ばれた五人が立って、扉の方へ向かった。みんなかなり緊張している。最後に黒い髪の長い女の子が入っていった。
数分後、五人が出てきた。五人共普通だ。むしろ喜んでいるようにみえた。そして、それぞれの保護者と帰っていった。
「どうやら、大したことなかったようね」
「そうだね」
僕はかなり安心した。
「イーサン・スミス、イザベラ・テーラー、・・・」
「じゃあまた後でな。ジャスティン」
二人が、扉へ入っていった。数分後、二人が戻ってきた。
「気をつけろジャスティン。もの凄く痛いぞ」
「もうイーサンったら。ジャスティン、本当に大した事なかったわ。ほとんどじっとしてればいいだけだったわ」
「おい。ばらすなよ」イーサンがイザベラを睨みつけながら言った。
「そっか。ありがとう、イザベラ」
「ウィリアム・ジェンソン、・・・」
その後も、次々と名前が呼ばれ、終わった後保護者と帰っていった。
「では、ジャスティン・・・ウォーカー、・・・」
気のせいだろうか?今デイビス先生が俺の名前を見て、一瞬驚いたような気がした。

僕は、席から立ち上がって他の四人と扉の方へ向かった。扉を開けると、そこは少し小さめの部屋だった。長テーブルが横に置かれ、見た事のない機械が五台と、五人の女性が機械を前に、僕達の方を見て椅子に座って待っていた。

「最後に入った人は、扉を閉めて下さい」

一番左端の人が言った。最後に入ってきた子が扉を閉めた。

「では、先ほど呼ばれた順に、左から一人ずつ教官の前に立って下さい」

僕は、一番左端の女性の教官の前に行き、できるだけ背筋を伸ばして立った。

「ジャスティン・ウォーカーで間違いないですか?」

「はい」

他の子達も名前を確認されている。

「よろしい。ではそのまま少し立っていてください」

何が起こるんだ?目の前の教官の目つきが、鋭くなった気がした。そして、上から下へ僕を見た後、手元の紙に何か書いている。小さい声でつぶやいてるのが聞こえた。

「バストは、・・・ね。ウエストは・・・、肩幅は、・・・、腕周りと腕の丈は左が・・・右が・・・、足は丈は左が・・・右が・・・」

なるほど、能力で制服のサイズを見ているのか。

「では、今からリミッターを外します。政府の許可は取ってあります。左腕のリミッターを出して下さい」

僕は左腕を教官の方へ出した。教官は小さな鍵を取り出した。

「製造番号は、・・・で合ってるわね。」

僕のリミッターのバンドに書いている番号を鍵の番号と確認しているみたいだ。鍵を差し込んで回すと、バンドが外れた。

「では、手をこの機械の上に置いて」

少しすると機械の向こう側から紙が出始めた。

「ふむ。主要能力種別　Aタイプ。能力　風の操作。これは。すご

く珍しい能力だわ。能力レベルは三ね。さてと続いて、補助能力はと、・・・」

教官が読むのを止めた。かなり驚いている。紙が続けて出てくる。しばらくして、紙が止まった。教官は、それを食い入るように何度も見返している。

他の教官も集まってきた。何やら騒いでいる。なにかあったのかな。みんながいる前ではどうか止めて。

「信じられない。ジャスティン・ウォーカー、君には補助能力がない」

えっ。他の能力がないって意味かな?すると、男の教官が続けて言った。

「君には補助能力ではなく、主要能力が七つもある。主要能力種別Aタイプ（精神操作）。能力は、風の操作、テレパス、過去のリード能力、現在のリード能力。続いて、種別　Bタイプ（肉体操作）。能力は、肉体活性（脚力特化）、感覚活性（触覚特化）、治癒活性の六つ。潜在能力値は全て三」

リミッターをはめた後、僕達は教室を出た。周りの四人はじろじろ僕を見る。僕達が戻ったのを見て、デイビス先がまた名前を呼び始めた。僕はイーサンの元へ急いで向かった。

「どうだった、ジャスティン。ずいぶんかかったみたいだな。体のサイズでも測れなかったのか?俺ら二人は割と高レベルだったぜ。俺の主要能力はまぁ物質操作だな。レベル四だってよ。補助能力は、催眠と幻覚らしい。催眠も幻覚も珍しいんだって。レベルは当然一だな。補助能力は、始めは全員一らしいな。だから、分からないんだな。イザベラは」

「私は当然、主要能力が感覚活性（視覚特化）のレベル四と、補助能力が、肉体活性（機敏性特化）、知力活性ね」

「お前はどうだったんだ?」

口を開きかけると、叔母さんが近づいてきた。

「終わったのね。こんにちわ。イーサン、こちらのお嬢さんは?」

「あっ。こちらイザベラ・テーラーです。お友達です。イザベル、僕のお母さん」
急に口調が変わった事にイザベラは気づいたみたいだ。しかし、素早く対応した。
「こんにちわスミス夫人。これからよろしくお願いします」
「こちらこそよろしくね、イザベラ。どうしたのジャスティン」
「たった今、能力判定についてジャスティンに聞こうとしていたんです」
「どうだったの?ジャスティン」叔母さんも聞いてきた。
僕は、一息おいて、一部始終を話しはじめた。聞き終わると、みんなかなり驚いていた。
「わぁ。ジャスティン、それって本当に本当に珍しいわ。今までに例がないと思うわ」イザベラはすごく嬉しそうに言った。
「すげぇ。あっ、凄いなジャスティン」その後、小声でイーサンが僕だけに言った。
「勉強も一杯だけどな。けど能力をものにすれば、俺達やりたい放題だぜ」
イーサンが言った後、僕はにやけてしまった。イーサンは叔母さんに話しかけた。
「お母さん、終わったことだし帰りましょう」
「えっ?そうね、そうしましょう。じゃあまたねイザベラ」叔母さんはイザベラに挨拶した。
「またね。イザベラ」僕とイーサンはイザベラに言った。
「またね」イザベラはお母さんのところへ向かっていった。
ジャスティンとイーサンは、はしゃぎながら帰っている。そんな二人の後ろ姿を、いやジャスティンを、スミス夫人は不思議な表情で見つめていた。

第6章　新たな出発

能力判定の翌日。僕とイーサンはイーサンの部屋でテレビゲームをしていた。
「くっそ」イーサンが頭を抱えて悔しがっている。
「また僕の勝ちだね。ゲームだけは僕に勝てないよね」わざとイーサンの耳元で言った。
「ゲームだけな」イーサンはゲームのコントローラを放り投げた。
「もう一回やる？」
「いや、もう止めだ」
そういうとテレビのスイッチが勝手に押されて消えた。イーサンはベットに倒れ込んだ。
「あーあ。暇だな。今日は雨でサッカーもできないし」イーサンは仰向けになって天井を見ている。
「そうだね」
「早く学校始まらないかな。学校が始まれば、リミッターも外れて能力も使いたい放題なのに」
「でも先生達がいるからやりたい放題って訳にはいかないと思うけど？」
「まぁな。でも俺達の能力レベルが上がれば、先生達にばれないようにいろんな事ができるようになると思うぜ。例えばゲイリーを階段から突き落とすとか」イーサンが起き上がって嬉しそうに言った。
「冗談だよね？」
「まぁ。それはやりすぎだけどな。でも、俺の物体操作は相当役に立つはず。催眠に幻覚もいたずらにはもってこいだろ？お前にも七つ主要能力がある訳だし。まぁ、レベルが上がれば色々できるようになると思うけどな」
「でも役に立ちそうなのは、風の操作と肉体活性ぐらいじゃないかな？リード能力って意味分からないし。どういう能力なのかイーサ

ン分かる？」
「俺も能力についてそこまで詳しくは知らないしな。父さんもそこまで詳しく教えてくれないし。イザベラなら知ってたかもしれないな」
　イザベラの名前を聞いて僕の顔が一瞬赤くなった気がした。イーサンに気づかれてませんように。でもイーサンはそんな僕に気づいてにっこり笑った。
「これはこれは。ジャスティン君は思春期を迎えてらっしゃる。イザベラ・テイラー嬢に恋をしてしまっているようだ。一歩大人になったな。うらやましいよ、俺はまだお前に比べたら五歳の子供だ」
「そうじゃないってば」僕の顔がますます赤くなったのが分かった。
「あんな子のどこがいいんだか俺にはさっぱりだ」イーサンは本当に不思議そうな顔をして、またベットに横たわった。
「イーサンは、イザベラが自分より頭がいいから気に入らないんでしょ」僕は笑いながら言った。
「ふん。聞いてなかったのか？あの子は知識活性の能力も持っているんだ。補助能力でレベルは一でもそれが影響してるんだろ」
「あーなるほど。そうなんだ」
「まぁそれを考えると、俺は純粋に頭がいい訳だ」イーサンは自慢げに起き上って、ベッドに腰かけた。
「でも、まぁあの子は確かに可愛いし、頭もいいな。で、どうするんだ？」
「どうするって、何が？」僕は何のことか分からず聞き返した。
「イザベラの事に決まってるだろ？」イーサンはますますにやけた。
「どうもしないよ？」
「おい。恋する少年よ。それじゃいつまでたっても進まないぜ？学校に入ればイザベラは間違いなく男子の注目の的だ」イーサンが近づいてきた。
「だから、僕は別にそんなんじゃないんだって」
「まぁ、いいさ。それも今後のお楽しみだな」

イーサンはそういうと何事もなかったかのように話を変えた。その後も僕達は色々話した。先生はどんな人だとうとか、授業はこんなんだとか。どれも勝手な想像だったけど、学校の事を考えるとどんどん時間が過ぎていった。

それからの1ヶ月はいつも通り過ごした。サッカーにゲームにサッカーにバスケットにサッカー。その間に制服と教科書も届いた。僕とイーサンは同じ寮生だった。僕達1年生の授業はほとんどが一緒らしい。「能力制御論　入門編」「精神（ｓｐｒｉｔ）コントロール法」「護身術入門」」「旧・新世界の歴史」「念具と装具の効果的使用法」「薬学と調合　入門」「能力とその実践　Ａ　入門編」「能力とその実践　Ｂ　入門編」の八冊だった。でも「能力とその実践　Ｂ　入門編」の教科書は僕しかなかった。イーサンはこの授業だけ能力別だろうって言ってた。じゃあ僕だけ1つ多いのか。嫌だなあ。勉強はイーサンと違って苦手だし。

そして、ついに入学式の前日を迎えた。その日の夜。僕達はいつも通りリビングで夕食を食べている。

「いよいよ。明日は入学式だな」叔父さんが僕たちの方を見ながら話しかけてきた。

「はい。お父さん」イーサンが答えた。

「緊張してはないか?学校は楽しいところだから、たくさん楽しみなさい。ただし、お行儀よくな」

「分かりました。叔父さん」

「明日の準備はもうできたの?」

「僕はもう終わりました」

「ジャスティンは?」

「あと少しで終わります。叔母さん」

「よかったわ。明日は早いから。準備が終わったら早く寝なさいね」

「分かりました。じゃあごちそう様でした。おやすみなさい」

「僕もごちそう様でした。おやすみなさい」

僕とイーサンは食器を片づけた後、二階へ上がっていった。
「まいったな。叔母さんにはああ言ったけどまだ全然終わってないんだ」部屋の前で僕はイーサンに話しかけた。
「ご愁傷様」イーサンは眠たそうに欠伸をしている。
「イーサンは本当に終わったの？」こんなに早くに終わるなんてすごい。
「もちろん。能力も少し使ったしな」
「えっ。ずるいなあ」
「ずるいもんか。俺の能力だ。それにまだ使える時間は短いから、ほとんど自分で準備しました。じゃあな、おやすみ。がんばれよ」
「待ってよ。少し手伝ってくれない？」
「うーん。少し考えさせてくれ。もちろんノーだ」
「そんな事言わずに頼むよ」
僕は両手を合わせて頼み込んだ。今から用意してたらきっとすごく時間がかかる。
「自分の事は、自分できちんとしましょうってな」
イーサンが自分の部屋に入ろうとした。
「待ってくれ。分かった。デュエルカードの好きなのをあげるから」
イーサンが止まった。
「うーん。悩ましいところだが本当に眠たいんだ。まぁ二枚もらえるとすればこの眠気も覚めるかもしれないけどな」
「分かったよ。お願いします」
「仕方ない。大事な従弟の頼みだ。手伝ってやるよ。デュエルカード三枚な」
仕方なさそうに部屋に入るのを止めてイーサンが僕の部屋に入ってきた。僕の部屋を見てイーサンが固まった。
「何だこれは？」
部屋の中は、さっき俺が服や本を引っ張り出したままだった。
「必要なものだけ、出しておいたんだ」
イーサンは呆れた顔をしている。

「じゃあ、まぁこれをトランクに詰め込めば終わりだな。服だけたたんで、後は能力でトランクに入れれば終わりだな。二人ですれば早いはずだ」
「たたむ方を能力でできないの？」
「できない。さっきも言った通り能力を使える時間は限られているし、この量は無理だ。細かい作業になる程、時間はもっと短くなる」
「そうなんだ」
イーサンは僕が不満そうに言うのを察した。
「文句があるのは俺の方だ。どうして出す時に片づけていかなかったんだ？」
「そういうの苦手でさ。さぁ始めよう」
イーサンがまた文句を言い始める前に、僕は急いで洋服をたたみ始めた。イーサンもぶつぶつ文句を言いながらだが、洋服をたたみ始めた。そして、三十分後。
「やっと終わったよ。イーサンは？」
「こっちも終わりだ」イーサンは肩を叩きながら立ち上がった。
「ありがとうございます。じゃあ仕上げをどうぞお願いいたします」
「分かってるよ」
イーサンは目を閉じた。数十秒後。イーサンが目を開けると、本や服が全部空中に浮いた。そして、一つずつトランクの中へ入っていった。最後の本が入ると、トランクが閉まり、カッチという音がして鍵が閉まった。
「わぉ。いつも思ってたんだけどさ、それってどうやってるの？」
「どうって？イーサンの風の操作と同じだろ？」
「実はまだ上手くコントロールできないんだ。サッカーの時は勝手に風が動いたんだ。あの後、試してはみたけど、軽く風が吹く程度でさ」
「うーん。そうだな。俺はイメージした後、念じてるかな。さっきはまず、トランクの中にものが入っていく様子を想像した後、それぞれの物に対して、具体的にこう動けって念じたんだ。でも俺も結

構時間がかかるし疲れるけどな」
「そうなの?でも僕イメージとか苦手だしな」
「とにかくやってみろよ」
言われるままに僕は目を閉じてみた。風が俺の周りを回るイメージ。うーん。風ってどんな感じかな。まあこんなんかな。そして、目を開けて風に（僕の周りを舞え）と念じた。するとそよ風が一瞬だけど、俺の周りに起こった。
「やった。ありがとうイーサン」
「まぁ。そんな感じだ。学校でもっと詳しく習うさ。じゃあ、おやすみ。また明日な」
「また明日ね」
イーサンが出て行った。僕はベットに横になって、電気を消した。けど、頭の中は明日の事で一杯だ。この家を離れて暮らすなんて始めてだ。どうなるんだろう?僕の能力は七つある。どんな能力なんだろう?うまく使えるようになるかな。色々学校の事ばかり考えて寝つけなかった。しかし、気づいたら、眠ってしまっていた。
翌日の朝。緊張と興奮で目が覚めた。目覚まし時計を見るとまだ五時半だった。もう一度眠ろうと目を閉じたが、眠れない。俺は仕方なく、起きてトランクの中を何度も確認した。忘れ物はないだろう。暇だから下でテレビでも見ようかな。階段を下りていく途中、リビングから声が聞こえてきた。
「あの子達大丈夫かしら」叔母さんの声だ。
「大丈夫だろう。学校には優秀なもの達が多い。それにあれは、ジャスティン達の事とは限らない」叔父さんもいるみたいだ。
「それもそうよね。それに未来は不確かなものだし」僕は階段にしゃがみこんで聞き耳を立てた。
「そうだ。特に能力者が関わる程未来は予測しにくい」
「大丈夫よね。あなた今日も遅くなるの?」
「あぁ。また奴らが騒ぎを起こしたようだ。おかげで、今日も早朝出勤だ。子ども達の入学式に出たかったんだが…」

叔母さんがキッチンに向かう音が聞こえて僕は自分の部屋に戻った。何の話だ。僕達の何の事だろう?それに叔父さんだ。僕達には興味ないように思っていたけど、入学式に出たかった?本当は子ども想いなのかな。でもじゃあなんでいつもそっけなく振るまうんだろう。ベットに入ってさっきの会話を思い出して、どういう意味なのか考えていた。そしてー

「ジャスティン。早く起きて」

叔母さんの声で目が覚めた。気づいたら僕はまた眠ってしまっていた。急いで、起きて下に降りて行った。イーサンはテレビを見ている。

「さぁ席について。それじゃ、食べましょう」

食器の音が響く。

「今日もお父さんは仕事だから、入学式には私だけ行くわね」

「そんなにお父さんは忙しいんですか?今日ぐらい休めなかったんですか?」イーサンがフォークを置いて叔母さんの方を向いて聞いた。今回ばかりはイーサンも不満そうだ。

「詳しくは知らないけど、能力者の犯罪組織同士の抗争が各地で起こっているみたいなの。お父さんは支部長だから、仕事ばかりになるのも仕方ないの」

「犯罪組織の抗争?ニュースでも聞きませんけど。抗争ならニュースになってもおかしくないのに」

イーサンがこんなに聞くのも珍しい。

「能力者は今のところ派手な事はしてはいないの。だから、対応に困っているの。裏では組織の抗争が起こっているのは確実だけど、犯人達の手がかりも証拠もなかなかつかめないの」

「・・・そうですか。なら仕方ないですね。お父さんは、大丈夫なんですか?」

「政府にも、優秀な能力者がたくさんいるから、いずれ問題も解決するわ。それよりあなた達は今日から学校なんだから、そっちの事だけを考えなさい」

「そうですよね。分かりました」
「学校では一」
叔母さんとイーサンの会話は続いていたけど僕は聞いてなかった。その間僕はずっと考えていた。叔父さん達の話していた内容が気になって仕方ない。「それにあれは、ジャスティン達の事とは限らない」あれって何なんだろう?
「ジャスティン?」叔母さんの声でふと我に返った。
「あっ、はいなんですか?」僕は上の空で答えた。
「どうかしたの?」叔母さんは心配そうに聞いてきた。
「いえ、まだ少し眠くて」
僕はわざと欠伸をして見せた。叔母さんは疑わしい顔で見ている。わざとらしかったかな?
「そう。学校では健康管理に気を付けてね。風邪をひいたりしないようにね」
「分かりました。気を付けます」
みんな朝食を食べ終わった。
「それじゃあ、忘れ物がないかきちんと確認してね。九時には出ますよ」
「分かりました」僕とイーサンは二階へ上がっていった。
「ジャスティン。何か考え事か?」
「いや、本当に眠かっただけだよ」
「そうか。ならいいけど。じゃあまた後でな」
イーサンは部屋に戻っていった。とっさに嘘をついてしまった。イーサンに嘘をついたのは初めてだ。でも、まだ話の内容が何なのか分かってないし、何となく叔父さんが入学式に来たがっていた事も言わない方がいい気がした。
九時になって僕達は大きいトランクを抱えながら出発した。今日は叔父さんが運転手付きで車を借りてくれたみたいだ。叔父さんはやっぱり偉い人なんだな。車に荷物を乗せて三十分ぐらいして学校についた。

学校について叔母さんが受付すると僕達の荷物を預かってくれた。どうやら荷物を寮に運んでいてくれるようだ。それからまた外に出て叔母さんと別れの挨拶をした。

「それじゃあ二人とも頑張るのよ。体に気をつけてね」

そう言うと叔母さんが僕たち二人にハグをしてきた。僕達は驚いたけどハグを返した。

「次の休暇にね。それじゃあ」

そう言うと叔母さんは車に乗って帰っていった。叔母さんが見えなくなるまで僕達は手をふった。

「よし。じゃあ行くか」イーサンがまた学校に向かって歩きだした。イーサンは叔母さん達と離れて暮らすなんて全然平気なのかな。

「うん」

イーサンについて行くとこの前の大ホールの前についた。大きな樫の木の扉だ。この先に僕らの新しい生活が待っている。

第7章　四つの寮

大広間に入るとすでに多くの人達がいて話しこんでいた。四つの長テーブルが縦に並べられ、能力判定の時に見た覚えのある子や上級生が着席していた。広場の上座にはもう一つ長テーブルが横に置かれ、すでに何人かの先生達が座っていた。能力判定の時と違って天井は天空に向かって開いているようだった。でもこの前来た時は確かにここは建物の中だった。そこに天井があるなんて信じられない。

「多分幻視を利用してるんだろうけど本当にすごいな。こんな事もできるのか」イーサンが天井を見ながら感心したように言った。それから視線をテーブルに戻し見回していた。

「さてと俺達のテーブルはどこだ?確か俺達の寮は・・・」

「シルフ・・・だったと思うよ?確か変な鳥のマークが書かれていたと思うけど」

「そうだったな。あれかな一番右端の垂れ幕があるテーブル」

よく見るとテーブルの真上に垂れ幕が掛けられている。一番左端の垂れ幕には、燃えるような赤い竜が描かれている。左から二番目は、そびえ立つような巨大な亀に蛇が巻き付いた生き物が描かれている。その隣は、体は鹿で顔は龍に似ていて、牛の尾と馬の蹄と頭に一本の角が生えた生き物が描かれている。そして一番右端には、あの不思議な鳥が描かれている。色んな鳥が混ざり合ってるみたいで優雅に飛んでいる姿が描かれている。

「多分あそこだろう。行こうぜ」

イーサンはそう言うと、一番右端のテーブルに向かって歩きだした。近づいてみると前の方の席以外はほとんど埋まっていた。

「すみません。失礼ですがこのテーブルはシルフのテーブルですか?」イーサンが後ろの席に座っていた男の人に話しかけた。

「ん?あぁ君達一年生だね。このテーブルであってるよ。ようこそ

シルフへ。僕はパーシル・ハーベルだ。今年から監督生なんだ。一年生は前の席だよ」

なんとなく気取った話し方をする人だ。髪は赤毛の短髪でひょろとしていて背が高い。握手をした後僕たちは前の方の席に向かった。すると見覚えのある後ろ姿が見えた。茶色のまっすぐな髪。

「イザベラ。君も同じ寮だったんだ」僕は嬉しくて声をかけた。

「あらジャスティン。それにイーサンも。久しぶりね。もうすぐ会えると思っていたわ。あなた達と同じ寮で良かったわ」イザベラはにっこりと笑いかけた。僕達はイザベラの向かい側の席に座った。

「まだあまり一年生は着いてないみたいだな」イーサンが言った。

「あらでももう大分到着したんじゃないかしら。見て」イザベラがホールの扉を指さした。

見覚えのある顔が何人も入ってくるところだった。まだ入ってきたばかりなのによく気づくなあ。イザベラの方に視線を戻した。

「君はいつ頃着いたの?」イーサンが聞いた。

「私はあなた達が着く十分ぐらい前に着いたわ。家が遠いから早めに来たの」

「そう言えば君はどこ出身なんだい?」

「私?そういえば言ってなかったわね。トライベッカよ。行った事ある?」

「いやないな。俺達まだ外出とかあまりしたことないし」

「あらそうなの?まぁいいところよ。また二人で遊びにきてね」

二人の会話を聞いていると、隣の女の子が僕達の会話に入りたそうに顔を交互に向けている。

「イザベラ。その子は友達?」僕はイザベラに聞いた。

「あらごめんなさい。私ったら。こちらエマよ。さっきお友達になったの」

「リリー・キャンベルです。どうぞよろしく」

女の子は立って握手を求めてきた。この子も可愛らしい。栗毛に緑色の目が印象的だ。

「俺はイーサン・スミスだ。よろしく」そう言って握手するとイーサンは座った。
「僕はジャスティン・ウォーカー。よろしく」
僕が握手しようとすると、リリーは驚いた表情で握手してきた。
「あなたがジャスティン？あなたの事能力試験の時にすごく噂になってたわ」
そう言うとリリーは座った。僕はあっけに取られて少し立ったままでイーサンに「座れよ」と言われて座った。
「噂になったって？何が？」僕は慌てて聞いた。
「お前って鈍感だよな。あれだけ珍しい能力な上に能力が七つもあれば当然だろう」イーサンが呆れた顔で言った。
「えっ。まあ珍しい能力なのはイーサンから聞いたけどそんなに？」
僕は三人を見回しながら聞いた。
「ジャスティンあなた能力のこと全然知らないの？」イザベラが言った。
「私でも知ってるわよ？」リリーが言った。
「こいつはバカなんだ」イーサンが笑いながら言った。
「そんなことないよ。確かに頭は良くない方だけど」僕は少し落ち込みながら細々と言った。
「すまん。冗談だよ。バカというより能力に目覚めたのが最近であまり能力について知らないんだよ」
「そうなの。それじゃあ仕方ないのかもね。私だってそんなに詳しくは知らないし」リリーが言った。
「そうねえ。私が知っている事を教えるわね。ジャスティンの風を操る能力が珍しいのは風が四元素の一つだからなの」イザベラが言った。
「四大元素？そういえばイーサンも言ってたような」
「そうよ。四大元素っていうのは火、水、土、空気の事よ。昔から世の中の物質はこの四つでできていると言われていたの。これは、私達の能力についても言えることなの。私達の能力は、私達人間が

持つそれぞれの性質、まあ性格とかを基にして決められるの。その性質も、この四つの元素の持つ性質に分けられると考えられているの。だから寮もそれぞれ四元素を表していて、能力によって分けられたの。寮の名前は西洋の四精霊の名前から取っているわ。そして象徴するシンボルは四聖獣よ。私達の反対側のテーブルは、サラマンデル。あの竜は赤竜。火の象徴。隣のテーブルは、アンダイン。あの亀は玄武。水の象徴。私達の隣はノーム。あれは麒麟。土の象徴。そして私達のこの鳥は鳳凰。風の象徴よ。だから当然あなたはこのシルフの寮よ。イーサンの能力も物体の周りの重力を操っているからこの寮よ。ここまでいえば分かると思うけど、だからこそ、この四元素を直接操る能力はすごく珍しいの。新世界になってから発見されたのは火の使い手とあなただけよ。過去をさかのぼるとどうやら昔にもこの四つを操る人達はある一定の周期で現れていたみたい。でも同じ時代に一つの元素を使えるのは必ず一人よ。分かった？」

僕達三人はあっけにとられていた。話終わったのに気づいたのも少し後だった。イーサンですらも理解するのに時間がかかっているようだ。僕なんか話の半分もよく分かっていない。

「よくそれだけのことを知っているな。両親のどちらかが政府の人か？」イーサンが聞いた。

「あら違うわ。『能力訓練の歴史』を読んだの。それに『新・旧世界の歴史』も。この学校の事も書いていたわ」

「あの新しい教科書？イザベラって本当にすごいね。僕なんかあんな本読み始めたらすぐ眠くなっちゃう」

僕は本当に感心してしまった。イザベラは照れくさそうだ。

「私も全然知らなかったわ。とにかくイザベラがいればテストも助かるわね」リリーが嬉しそうに言った。

イーサンは少し面白くなさそうな顔をしていた。

「見ろよ。先生が集まってきたぜ。もうそろそろ始まるんじゃないか」イーサンが前を指さして言った。

周りを見ると生徒のテーブルはほとんど埋まっていた。上座のテーブルにはもう先生達が全員座っている。気のせいだろうか。僕がデイビス先生の方を見ると目をそらされたような。それに何人かの先生は僕の方を向いてこそこそ話している気がする。能力のせいかな。先生達ほどの人でもやっぱり珍しいのかな。来賓席の真ん中で大きな金色の椅子に一人の男性が座っていた。背がとても高そうだ。長い髪や髭が印象的で、白髪まじりだ。淡いブルーの目はきらきらしていて、小さな丸眼鏡をかけている。ゆったりとしたマントを羽織っている。しばらくすると男性は立ち上がった。

「ようこそ！新入生の諸君！おめでとう！私が本校の校長のグレゴリー・ブラウンじゃ。それではこれより入学式を始めましょうぞ」

ちょうどその時大広間の扉が開き二人の男人達が入ってきた。とてもそっくりな二人だ。

「どうやら俺達遅刻みたいだな弟よ。いやしかしなぜみんな俺達を見る」

「まあ俺達は有名だからね。でもこの視線は眩しすぎるな」

「オッホン」厳格そうな女性の先生が咳払いをした。

「リアム、ノアまたあなた達ですか。早く席に付きなさい」

「了解しました先生」二人は揃って返事をして、僕達の寮の席に着いた。

「校長先生続きをどうぞ」女性がそう言うと校長先生は面白そうな顔で眺めるのを止めて話し始めた。

「さてそれでは仕切り直そうかの。今から入学式を始めますぞ。サラマンドルの寮から順に新入生の名前を呼びますぞ。呼ばれた者は順に前に出てくるように」

さっきの厳格そうな女性が小さなテーブルと機械を真ん中に置いた。

「リミッターに寮の情報を読み込ませますぞ。それと皆に顔を見てもらわねばのう。それではデイビス」

「アンナ・ガルシア」

一人の小さな女の子が前に出てきた。とても緊張しているみたいだ。真ん中まで来ると僕達に向かって深々とお辞儀をして、先生達の方を向いた。

「手を前に」

そう言われて女の子は手を機械の上に置いた。「アップロード完了」と聞こえた。

「ようこそサラマンデルへ」

サラマンデルの寮から声が聞こえた。するとみんなが拍手した。女の子は笑顔で戻っていった。次々と名前が呼ばれみんな前に進み出ていった。そしてやっとシルフの寮の番になった。イーサンは最初に呼ばれた。堂々とみんなの前で挨拶した。イザベルもとても優雅に振る舞い、緊張している様子を見せなかった。どうしようすごく緊張してきた。そして―

「ジャスティン・ウォーカー」

僕が進み出ると突然広間中が静かになった。少しするとささやき声が静かな波のように聞こえてきた。

「ジャスティンって例の噂の子か？」

急に緊張が高まって段差でつまづいてしまった。早く終わって欲しい。みんなを見ないようにしてお辞儀して先生たちの方を向いて、急いでリミッターを前に差し出した。「リード完了」そう聞こえると、校長が「おめでとう」と言うのが聞こえた。そして―

「ジャスティンを取ったぞ！これは今年は優勝をいただきだぜ！」

さっきの双子が立ち上がって叫んだ。

するとシルフのテーブルから歓声と拍手が急にボリュームをあげたラジオのように聞こえてきた。一気に緊張は溶けて、笑顔でテーブルに戻った。続けてシルフの新入生が呼ばれ続けた。最後はリリーだった。リリーの番が終わると全テーブルから歓声が沸き起こった。そして新入生以外の上級生がみんなで合唱し始めた。素敵な歌声だった。部屋全体が歌詞に合わせて色々な風景を映し出し、ホールにいるなんて信じられなかった。歌が終わると上級生達は席に着

いた。そしてふたたび校長先生が立ち上がった。
「改めて入学おめでとう！これで諸君は本校の大事な生徒になったわけじゃ。みな仲良く協力し時には競いながら精進していくことを願いますぞ。リミッターをかざせば寮に入れるようになっておる。さてそれでは新学期を迎えるにあたりいくつか知らせておくのう。一年生に特に注意しておくが校内には立入禁止となっている場所が多々あるので、死にたくなければ決して入らぬよう。これは上級生にも何人かの生徒達に特に注意しておくのう」
　校長はキラっとした目でさっきの双子を見た。
「冗談だよね？死ぬなんて」僕はびっくりしてイーサンに聞いた。
「まあよっぽど強力に守られてるんだろ」イーサンはそういうと校長の方を向いた。
「それと、毎年本校では各寮ごとに点数を競って寮の優勝を決めておる。寮の点数は、授業や功績によって先生から点けられる。それに学年終わりには、学年別で代表者三名づつの能力対決バトルを行う。その点数も加算される事になるので頑張ってのう。ではこれで歓迎会を終わりますぞ。明日からみんな頑張ってのう。今からちょうど昼食の時間かのう。各自朝食を食べたら解散とする」
　さっきよりも大きな拍手が起こった。みんな待ちきれないばかりにテーブルの前で待っている。しばらくするといつの間にか豪勢な料理がところせましと並べられていた。僕も我慢できずに食べ始めた。すごくおいしい。叔母さんの料理も最高だけど、こんな味始めてだ。

第8章　風の印

その日の午後。僕達は校舎を出て、荷ほどきをするために寮に向かった。外から見ると分かったが、校内には校舎が二つあるようだ。校舎の目の前には大きな噴水があり、その横にハドソン川沿いに沿ってメインストリートが続いている。メインストリート沿いに北に進むと左右にそれぞれ二つずつに分かれた寮が見える。右手には、サラマンドルの寮があり、その奥にノームの寮がある。左手にはアンダインそして奥にシルフの寮が見える。寮の前にそれぞれ壮大な赤竜、麒麟、玄武、鳳凰の銅像が立っている。僕達はさっそくシルフの寮に入った。大きな扉の前にはセンサーがついていて、リミッターをかざすと扉が開いた。中に入って廊下をまっすぐ、少しの間進むと扉が見えた。廊下は左右に続いている。その扉を開けてみると大きな談話室があった。目の前にはテーブルと暖炉があり、ソファがある。全体的に緑色の壁紙が印象的だ。談話室の天井は吹き抜けになっていて、大ホールと同じように天空に向かっていくような光景が広がっている。そして談話室の右手に男子寮、左手に女子寮に続く螺旋階段に出る扉があった。いったんイザベラとリリーと後で校内を探検する約束をして、僕とイーサンは自分達の部屋に向かった。自分達の部屋に向かう途中で、声が聞こえてきて、さっきの双子に会った。

「リーが新しい地下道を見つけたってよ。多分俺らがもう見つけた道だと思うけどな」

「まあそう言わずに行ってみようぜ。あっ。ジャスティンじゃないか。自分の部屋に行くところか？」

「はっはい。そうです」僕は答えた。

「まあそうかしこまるなって。俺達には敬語はナシな。もし敬語を使ったらその時は」一人が意地悪そうに言った。

「おいリアム。よせよ怖がってるじゃないか。俺達は双子のウィン

チェスター兄弟だ。俺はノア。こっちが弟のリアム」
「イケメンな方が弟だからな」
「何を言ってるんだ。俺の方がイケメンに決まってるだろ？そうだよな？」
僕達はバツが悪そうに笑った。
「兄貴よせって。真実は聞かない方が兄貴のためだぜ。まあ冗談はさておき、見ての通り兄貴は青い目で、俺は緑の目だから。よろしくな」
「よろしくお……よろしく」僕はたどたどしく挨拶して二人と握手した。
「俺は、イーサン・スミスです。よろしく」イーサンと兄弟は握手した。
「スミスって、ジョン・スミスさんのお子さんか？」リアムが聞いた。
「そうですけど父を知ってる？」
「まあな。俺のママがスミスさんにはお世話になってるんだ。そうか。なら二人とは仲良くなれそうだな。この学校の事で何か分からない事があったら俺達に聞け。近道だってなんだって俺達程この学校を知ってる奴はいないからな。じゃあまた後でな」
そういうと二人はドタバタと階段を降りていった。
「面白そうな二人だったな」
僕とイーサンは笑いながら、自分達の部屋に入っていった。その部屋には窓が二つあり深緑色のビロードのカーテンがかかっていて、部屋に日が差していた。四本柱の天蓋付きのベッドが四つ並べられていた。僕達は急いで荷ほどきをした。イーサンは能力を使って早めに終わったようだ。僕がもモタモタしていたので、イーサンが能力を使って手伝ってくれた。
「ありがとう」
「早く探検に行きたいからな。行くぞ」
僕達二人は談話室に降りていった。それから十分くらい経ってイ

ザベラとリリーが談話室に入ってきた。
「あら。私達すごく早く終わったと思ったんだけど」イザベラが申し訳なさそうに言った。
「そんな事はいいから早く行こうぜ」
イーサンはうずうずしながら寮を飛び出した。寮を出て、さらに北の奥に進むととても大きくて古い図書館があった。もっと奥に進むといくつかの公園やスポーツ施設、たくさんのお店が並ぶストリートや道を外れたところには小さな森もあった。途中カフェでジュースを飲んだりした。とても大きくて広くその日の内には全部は見きれなかった。探検に夢中になっているといつの間にか夕方になっていた。「夕食は確か七時だったと思うわ。もうそろそろ帰ったほうがいいわね」リリーがリミッターの時計を見ながら教えてくれたので、僕達は校舎に帰る事にした。メインストリートには何台かのバスが通っていて、帰りはバスで校舎まで戻った。夕食もとても美味しくてちょっと食べ過ぎたせいか、その日はジャスティンは寮に戻るとあっという間に眠り込んでしまった。
翌日ジャスティンは、イーサンと同じ部屋のサムとダニエルと一緒にホールへ向かった。ホールに向かう途中何人かに指をさされたりささやかれたりした。「あの子がジャスティン？」「普通の子じゃない」気にしないふりをしながらホールに向かい朝食を食べて、教室に向かった。校舎は三階建てであまりに広かった。階段がありとあらゆるところにあってつながっている。イーサンがいないと無事にたどり着けなかった。新学期が始まっての一週間はあっという間に過ぎていった。

水曜日の真夜中には望遠鏡で夜空を観察して、星の名前や惑星の動きを勉強する「天文学」の授業だった。週三回、校舎の薄暗い地下室で、顔色の悪い男の先生から「薬学」を学んだ。難しい名前の薬草の名前や調合法とその用途について勉強した。「念具と装具の使用術」の授業は意外に退屈だった。念具や装具の種類や使い方を

ただ聞くだけだった。眼鏡をかけた気難しそうな顔をしたこの男の先生は気が弱そうだった。しゃべり方もおどおどしている。どうやら僕達のスピリットの訓練の第一段階が終了すれば、スピリットを込めた色々な薬を作ったりや念具を実際に使ったりできるようになるらしい。「能力実践」の授業も年明けから始まるようだ。

「能力制御論」はとてつもなく難しかった。あの厳格そうな女性の先生だった。厳格で聡明なこの女性は最初の授業でいきなり演説をし始めた。この人には逆らってはいけないと思ったのはどうやらジャスティンだけじゃないようでクラスはとても静かだった。

「みなさん改めまして入学おめでとう。私はロウェナ・モーリスです。モーリス先生と呼ぶように。さて能力制御論は、本校で学ぶ最も重要な科目の一つです。なぜならばこれから私が教えていく事は、あなた達がこれから個々の能力を磨いていく上で、最も基礎的な部分でもあり、また最も複雑な部分であるからです。これらの能力の制御に関する理論は体系化されてそれほど日が経っていません。したがって未だこれらの分野は分かっていない部分も多いと思われます。これらの基礎的な知識を生かして、あなた方はそれぞれの能力を制御していく方法を自分達で探していくのです。よろしいですか？」

クラス中が頷いた。

「よろしい。いい加減な態度で私の授業を受ける生徒は出ていってもらいます。二度と私のクラスに入らなくて結構です。最初に警告しておきます。それでは教科書の五ページを開けて、これを写すように」

先生が黒板を棒で指すと、どこからともなく字が現れた。僕達は慌ててノートを取り始めた。クラス全員がノートを取り終わると再びモーリス先生が話し始めた。

「よろしいですか。今日からは、まずあなた達の能力の基礎について教えます。あなた達の能力の性質は、大きく四つに分かれていま

す。これらは四元素とも言われ火、水、土、風の四つです。これらの四つの性質は黒板に示したような強弱関係があります。……またさらにこれらの能力の種別は大きく分けて三つです。Ａタイプ、Ｂタイプ、Ｃタイプです。これらはスピリット、精神又は生命エネルギーから生み出される能力であることは変わりありませんが、それぞれエネルギーの向かい方が違います。Ａタイプは自らのエネルギーを外に向け外界の自然エネルギーと融合させながら生まれる能力です。古来このタイプは魔法、呪術等と言われてきました。ですから、このタイプは大して自分のエネルギーを使わなくても莫大なエネルギーを生むことができます。ですが……。一方Ｂタイプは、自らのエネルギーを自分に向けることによって身体能力を上げる事が可能です。これは中国において気功などと呼ばれていました。自らの精神力と体力を向上させることによってその能力は飛躍的に向上します。また……。そしてこの２つに属さないのがＣタイプです。このタイプについては今のところはっきりは分かっていません。おそらくそれぞれの能力を何らかの形で複合、もしくは合成した能力と考えられています。過去の文献などから分かっている能力としては未来予知が有名です。またその他にも……」

途中からほとんど先生の言っていることがよく分からなくなった。絵でなんとなくは分かるけど。この授業は、イーサンやイザベラに教えてもらいながら何とかついていっている。こういう難しい理論って僕苦手だ。

「精神コントロール法」の授業は、ハワード副校長の授業だった。この先生も独特の空気でみんなをだまらせる能力がある。

「さて諸君。この授業では、精神エネルギーすなわちスピリットを鍛えると同時にそのコントロール法を学んでいく。精神エネルギーは君達の能力を生み出す基になっている。すなわち能力を生かすも殺すもこの精神エネルギーにかかっている。精神エネルギーの容量や効率的な変換は、能力の使用回数に大きく関わってくる。そして

エネルギーを集中させることで能力のパワーや持続力につながってくる。教科書の二ページを開けたまえ。今日はこの精神集中をペアで行う」

僕とイーサンはペアになって、教科書の通りのポーズを取って目をつむり精神を統一させるのをお互いに確認した。イーサンのを確認していると先生が僕達の近くまで来た。僕らのところに来て少し見ると先生は行ってしまった。なぜだろう避けられているような気がするのは気のせいなのだろうか。

「歴史学」の授業は、想像してた書き取るだけの授業とは違って不思議な授業だった。教室に入るとそこには別世界が広がっていた。昼だというのに真っ暗で、天井にはきれいな星がたくさん輝いていた。みんな部屋に入るなり上を向いて感激していた。

「みなさんこんにちわ。さあみなさん地面に座って」中年の少し背の低い女性が現れた。続けて先生は話し出した。

「さてみなさん私はマリア・シェラー教授です。よろしく。あなた方は天文学で星の勉強をしましたね。そこのあなた。あの星は何か分かるかしら?ミス?」イザベラがさされた。

「テーラーです。りゅう座です先生」

「あらよく勉強しているわねミステーラー。よろしいシルフに一点。さて星座は私達の能力の歴史を見ていく上でとても重要なものです。りゅう、みずがめとみずへび、きりん、ほうおう座。これらはあなた達も知っての通り、四大元素を象徴する生き物です。歴史を見ていけば、これらの星座を解釈することによって様々な文明が生まれた事が分かります。例えば」

先生が手を振ると夜空は一瞬にして消え、眩しい太陽が指した。そして目の前にはあのエジプトのピラミッドとスフィンクスが現れた。

「わぉ」生徒全員が驚いて歓声をあげた。

「あなた達も知っての通りここはエジプトです。エジプトははるか

昔に文明を気づいたと言われていました。そしてこのエジプトの人達は星座を解釈することが既に出来ていたのです。私達の能力が目覚めるまで、旧世界では単に高度な文明を築き上げたと考えられてきました。そして、その多くは謎に包まれていたのです。ですが私達が能力に目覚めた事によって多くの事実が分かりました。それまで、いわゆる四大文明と呼ばれてきたエジプト、メソポタミア、インド、中国の文明を築き上げた人達は能力者であった事が分かったのです。そして、エジプトは水、メソポタミアは火、インドは風、中国は土を象徴していたのです。さらに昔には、これら全ての能力が一つであった時代があるとも言われています。そしてこれらの文明は私達が能力に再び目覚めることを予期していた事も分かっています。私達が能力に目覚めたことによって、今まで明らかにされていなかった歴史が一つになろうとしているのです」

授業が終わると僕はしばらく上の空だった。とても不思議な授業だった。イーサンに言われて我に返った。

「おい大丈夫か？」

「う……うん。とても不思議な授業だったね」僕は頭を振りながら答えた。

「少し宗教くさかったけどな」笑いながらイーサンは言った。

「まあただ今までの歴史の勉強と違って面白そうだよな」

「そうだね」

確かに面白そうだ。でも気になっていたのは先生が少しだけ見せてくれたインダス文明の遺跡だ。先生は何も言わなかったけど、あれってもしかして。そうあのマークは確かに能力が目覚めた日、僕の額に出ていたあのマークだった。

第9章　立ち入り禁止

　授業が始まってから一週間目の金曜日の夜。僕とイーサンはイザベラとリリーの四人で楽しく夕食を食べていた。
「ふぉーぞーひぃてふぁより……かんたんだったな」
　イーサンは腹ペコでステーキを口一杯にほおばりながら話すので全然聞き取れなかった。
「話す時は食べてない時にしなさいよ」イザベラが厳しくたしなめた。
　リリーと僕は二人の会話を聞いて笑っていた。
「すみませんでしたね！」イーサンが口をナプキンで吹きながら続けて言った。「想像してたより簡単な授業だったよな」
「あらそうかしら？制御能力論なんてすごく複雑な理論だと思うし歴史だって、天文学だって……」
「君は深く考えすぎなんだよ」イーサンがイザベラが続きを言おうとしたのをさえぎった。
「リリーはどうだった？」僕はリリーに聞いた。
「そうねこの二人みたいに頭は良くないからついていくのでやっとだわ。面白かったのは薬草学かしら。私薬作るのすごく得意みたい。先生に褒められちゃった」リリーはみんなに最後の言葉を嬉しそうに言った。
「すごいじゃない」リリーも感心したように言った。
「うん。大したもんだよ」イーサンはそう言うと今度はポークチョップにかぶりついた。
「すごいなみんな。僕なんて全然だよ。歴史は面白そうだったけど、それ以外は……ついていけるのかな」僕は落ち込みぎみに言った。
「大丈夫よジャスティン。あと一年もすれば見違えるわ。それに私達より能力が多い分大変だろうけどきっと卒業する頃にはすごいことになってるんだから」イザベラが優しい声で言った。

「すごいことって？」
「だって卒業後の進路は能力によって決まるじゃない。あなたならきっと色んな道が選べるわ」
「そうよ。しっかりしてジャスティン。男の子でしょ。まだ始まったばかりじゃない」リリーも励ましてくれた。
「ふぉーだぞ！おれふぁてぃなるあいやれるふぁ」イーサンがこっちを向いて話してきた。
なんて言ってるか分からなかったけどイーサンの顔に笑ってしまった。不安だけど、この四人ならなんとかやっていけそうな気がした。
「じゃあお先にまた後でな」
夕食の後、僕とイーサンはゲームをするために急いで寮に戻ろうとした。
大広間を出ていこうとした時後ろから聞き覚えのある声がしてきた。振り向くとそこにはゲイリーとルーカスが立っていた。
「よう。どうだったかな最初の一週間は？噂のぼっちゃまは大分苦労してるように見えますが」ゲイリーはパンパンな腕を組んで偉そうにしている。「まあお前の頭じゃすぐに落第だろうさ」イーサンが噛み付くように言った。
「ふんお前達が進級できたなら猿でもできるだろうよ」
「なんだと」ゲイリーは腕を振り上げた。
「まあまあ。ところでお前達今日の夜俺達と肝試しをしないか？」ルーカスはゲイリーをなだめるように言った。
「肝試し？何で俺達がわざわざそんな事しなくちゃいけないんだ」
「あれ？怖いのかなスミス君。まあなら仕方ないな。やはりシルフの寮の奴らは臆病者が多いようだ」ゲイリーはにやけながら言った。
「ふん。ノームだってお前らみたいなクズがいて可哀想だよ」イーサンがそう言うとゲイリーは今にも突進してきそうな態勢をとった。だけどルーカスに抑えられて動けないでいる。
「それで？どうするんだ？」ルーカスはゲイリーを抑えながら言っ

た。
「いいさ。何時にどこに行けばいい？」
「イーサン。本気なの？」
「八時ちょうど十七番通りの奥にある洞穴だ」ルーカスが答えた。
「分かったよ」
「どうしたの？」
ちょうどその時リリーがやってきた。
「ゲーム私も混ぜてほしいなって寮に戻ろうとしたら、あなた達が言い合っているのが見えて」
「いやなんでもないよリリー。もちろんいいよ。一緒にやろう」僕はイーサンをちらっと見ながら言った。
「おじけづいて逃げるなよ」ゲイリーが吐き捨てるように言った。
「そっちこそ」
二人はまたノームの寮テーブルに帰っていった。
寮に帰って談話室で僕達はＵＮＯやテーブルゲームをして遊んだ。七時半ぐらいになって僕達は自分の部屋に戻った。懐中電灯とか役に立ちそうなものを準備して僕達は寮を抜け出した。
「暗いな。寮が閉まるのは九時だけどこの辺をうろついているのを見られるのはまずいな」
目立たないようにしてやっとのことで十七番通りに着いた。さらに奥を進むと辺りの明かりはほとんどなくなってきた。すると通りの突き当たりに、不気味な洞穴と地下に続く階段があった。僕達二人は辺りを見回したけど、まだあの二人は来ていない。もうすぐ八時だ。あと一分……十秒…五秒…一秒…一分……十分が過ぎてもあの二人はこない。
「ねえイーサン。僕達あの二人にだまされたんだよ」イーサンがイライラしているの見て僕は言った。
「くそ。あいつら一体何が目的だったんだ」
「帰ろうイーサン」
「待てよせっかくここまで来てこんな面白そうな洞穴を見つけたっ

ていうのに帰るのか？」
「イーサン。でもいかにもここ立ち入り禁止っぽくない？絶対何かあるって」
「でもここに来る途中何も警告するようなものなかっただろ？」
「そうだけど……でもやっぱり帰ろうよ。この洞穴すごく嫌な感じがする」
「仕方ないな。お前がそんなに怖がりだとはな」
僕達が帰ろうとすると、僕達が来た方から物音が聞こえてきた。
誰かがやってくる。
「ヤバい隠れるんだ」
「でもここ隠れるところないよ」
「洞穴の中に入るんだ」
僕達二人は慌てて洞穴の階段のところにしゃがみこんで隠れた。
ちらっと見てみると、見覚えのある人が懐中電灯を持ってやってきた。
「あの人確か……」息を潜めて僕がイーサンに聞いた。
「パーシルだ。監督生だから見回りしているんだな」
「あの人がいなくなったら見つからないうちに引き上げよう」
パーシルは洞穴近くをうろうろして誰もいないか確認しているようだ。しばらくしてパーシルはまたメインストリートの方へ戻っていった。
「よし今だ出るぞジャスティン」
イーサンにそう言われて立ち上がろうとした時、階段を踏み外してしまった。イーサンの手をつかんで何とか転げ落ちずにすんだ。
すると洞穴の奥から音が聞こえてきた。
「なんだなんだ？」僕達は聞き耳を立てた。するとその音はどんどん大きくなってきて、暴風が僕達を襲ってきた。僕達は洞穴の外に放り出されてしまった。
「イタタタ。何なんだ一体！くそ」僕達はすり傷だらけになって立ち上がった。

「早く寮に帰ろうよ。もうすぐ九時になっちゃうし」僕は一刻も早く逃げ出したくてたまらなかった。

痛さと早く逃げ出したい事で頭が一杯で周りに注意を払うのを怠ってしまった。メインストリートに出たところでパーシルに捕まってしまった。

「君達こんな時間にこんなところで何をやっているんだ。ここは立ち入り禁止区域の近くだぞ」パーシルはすごく起こった顔をして現れた。

「すみません。こんな時間帯にウロウロしてた事は謝ります。でもここが立ち入り禁止区域だなんて知らなかったんです。そんな標識もなかったし」イーサンは冷静に答えた。

「バカな。こっちへくるんだ」僕達はパーシルについて行った。

「見ろ。こんなに大きな標識に気付かなかったとでもいうのか？」パーシルの指で指した方には確かに『立ち入り禁止』と書かれた標識があった。

「そんな。絶対来る時はなかったです。なあジャスティン」イーサンがうろたえたように言った。

「うん」

僕は激しく頷いた。確かにここは通ったところだ。こんなに大きな標識に気づかないはずがない。でも……なぜだろう。ここを見た覚えがない。

「言い訳は聞かない。シルフ十点減点」

「そんな」

「見つけたのが僕だったからこの程度で済んだことを感謝するように。分かったら早く寮に戻るんだ。それからマダムローズのところに行ってその怪我を治療してもらうように」

あんなに怖い目にあった上に、入って一週間もしないうちに十点も減点だなんて。僕達は落ち込んで寮に帰ろうとした。するとどこに隠れていたのか急にゲイリーとルーカスそれともう一人ひょろながい男が現れた。

「おいお前ら。お前達から誘っておいてどういう訳だ？」イーサンが喰ってかかった。
「何の話だ」ルーカスがすました顔で答えた。
「そうそう」ゲイリーが言った。もう一人の男も頷いた。
「十七番通り奥の洞窟で肝試しをしようと言ったのはお前たちだろう」
「何のことかな。第一あそこは立ち入り禁止だろう。知らなかったのか？」ルーカスが言った。
「知らないも何も標識が……まさかお前たちの仕業か！」
「ようやく気付いたか。頭のいいおぼっちゃんだな。デリックの能力さ。人の注意をそらすことができるんだ。楽しかったかい？」
イーサンは怒り狂っていた。周りの石が一気に浮き始めた。
「まずいってイーサン。きっと他にも見回りがいるよ。今日のところは早く帰ろう」
「おやおや。ジャスティンの方が賢いじゃないか」ルーカスが挑発してきた。
「お前ら」イーサンの顔は真っ赤になって周りの石が集合し始めた。
「イーサン！」僕は大声で必死にイーサンに呼びかけた。
するとイーサンは我に帰って石は地面に落ちた。
「お前らこの仕返しはいつかしてやるからな覚えてろ！」僕達は三人を無視して寮に向かって歩きだした。
「待ってるよ。賢いイーサン」三人の笑い声が聞こえる。僕は振り返って立ち止まった。
「その時は僕もいるからな。お前達覚悟しておくんだな」
周りの風が収束し始めるのを肌で感じた。三人は少しうろたえたような顔をして去っていった。
「止めてくれてありがとよ。それからやるじゃないかジャスティン」
僕達は笑いながら寮に戻っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6191bb/

ジャスティン・ウォーカー～残された予言～

2014年2月21日18時43分発行